

新来外国人と日本人の態度

— 広島調査を中心として —

青 木 秀 男

一、現状と関心

一九八〇年代後半以降、日本に新来外国人（ニュー・カマー）が急増した。現状は、次の通りである。

一九九四年、来日した外国人は三九三万人で、内、アジア系が六四パーセント、南アメリカ系が三パーセントであった。外国人登録人口は一二八万人で、内、在日韓国・朝鮮人を含むアジア系が七八パーセント、南アメリカ系が一五パーセントであった〔総務庁 1994:29-30〕⁽¹⁾。

一九九三年、超過滞在した外国人は、三〇万人と推定された〔総理府 1994:22〕⁽²⁾。外国人労働者（日本で働く日本国籍以外の人）は一四〇万人で、内、永住者（在日外国人）が八〇万人、一時滞在者（出稼ぎ者）が六〇万人であった。出稼ぎ者の内、登録者が三〇万人、未登録者が三〇万人と推定された〔総理府 1994:22〕。

この現実に触発され、新来外国人の研究も増えた。新来外国人の労働の研究・法的地位の研究・生活問題の研究・…。そしてこれらの研究は、結局一つの問題に収斂する。即ち、新来外国人を受け入れる日本人の態度である。外国人の諸問題に、日本社会の顔が映る。外国人「問題」は日本人問題である。しかしこの視点を展開する研究は、なお少ない⁽³⁾。

本論の関心は、次の通りである。

①日本人の外国人に対する態度の深さの断層を明らかにすること。

②外国人の民族ごとの日本社会への受け入れの差異を明らかにすること。

第一の関心は、次の通りである。日本人の外国人に対する態度は、表層・中層・深層をなす⁽⁴⁾。即ち、世相と

ともにもうつろう態度から歴史の中で凝固した態度に至る深さの断層である。その断層のひだに、日本人の民族的自我が刻まれて⁵⁾いる。外国人研究は、日本人論に直結する⁶⁾。

第二の関心は、次の通りである。日本人は、一方で外国人をガイジンと一括する。他方で外国人を民族集団ごとに異なって受け入れる。この差異的受容の仕方、明治期の「脱亜入欧」から戦時期の「アジア主義」を経て戦後の「アメリカ主義」に至る、日本人の民族観の痕跡をみる。

二、今日の特徴

新来外国人は、一九九〇年代に入り、人口増加に加え、様相を変えた。今日の新来外国人の動向は、次のように特徴づけられる。

①多様化

新来外国人の民族構成は、アジア・南アメリカの民族集団を中心に多様化した。新規入国者・外国人登録者が増えるとともに、民族の数も増えた〔法務省 1993:234-238、250-251〕。民族構成の多様化は、日本人を含む民族関係の多構造化を促した。

②定住化

近年、新来外国人の超過滞在⁷⁾、家族・親族の呼び寄せ（移住連鎖）、日本人との国際結婚が増えた。これらの事態が、彼ら・彼女らの定住を促した。外国人の定住化は、日本社会での彼ら・彼女らの少数民族化を意味する。奥田は、アメリカの事例を参照しつつ、日本社会への新来外国人の定着を「同化」や「分離」と異なる「生活の場面、場面で意志的自覚的に接着テープのように張りつく」「粘着的適応様式」と呼んだ〔奥田・広田・田嶋 1994:8〕。田嶋は、それを「限定的多元主義」に基いて「可能な要素だけが適応する」型であるとした〔田嶋 1991:71〕。日本の都市に、繋がり核（教会、店舗、レストラン、学校、団体・行政施設）を中心に広がる、民族コミュニティが形成されつつある⁸⁾。外国人同士繋がりは、一方で仕事・生活の情報の出身国への伝達と家族・親族の呼び寄せを促す。他方で新来者の日本社会への適応（初期定着と安定化）を助ける。

外国人の定住化にともない、問題の焦点は移行した。議論の中心は、外国人労働者をめぐる労働と政策の問題から、住民・市民としての生活問題や「共生」問題に移行した⁹⁾。地域の寛容度、生活様式や人間関係のネットワーク、住み分け／住み合いに関する研究が増えた¹⁰⁾。

③階層化

新来外国人は、民族集団ごとに彼ら・彼女らを拒む社会の壁の高さに応じて階層化されつつある¹²⁾。社会の壁とは、法・労働・居住・言語・身体可視性等における社会生活上の制約・差別をいう。他方階層化は、外国人側の渡日/滞日の経緯・民族集団の規模と結束・民族文化の日本文化との類似性・日本社会への同化の度合等による、民族集団ごとの差異の結果でもある¹³⁾。

④連続化

現在、日本人/外国人という対抗的な二項関係が崩れつつある。これは二つのことを含意する。一、日系人(南アメリカ人)や日本人との国際結婚の子女の増加、海外帰還者や海外残留日本人への注目とともに、日本人と外国人が、民族区分として連続化しつつある[梶田 1996: 6章]。それに伴い「日本人」概念も拡大しつつある。二、日本人と外国人の社会関係が、生活場面に応じて連続化しつつある。奥田らは、この現象を「相互に入り組み、浸透しあう」「クサビ型関係」と呼ぶ[奥田・田嶋 1993: 3]

三、態度の深さ

1. 仮説

日本人の新来外国人に対する関係の深さを認知・態度

・受容指向について整理すると、表1のようなになる。表層・中層・深層の次元で、認知が態度を規定し、態度が外国人受容の指向を規定する。以下説明する。

①表層—外国人をガイジンと一括するような「一般的認知」の次元である。それは、時代の風潮、外国人に関わる出来事、出身国と日本の国際関係に影響されて転変する「漂流的態度」を生む。それは、人々の態度の内奥に沈殿した基底的な他民族観から切り離されている。国際化の風潮が蔓延し、同時に外国人との個人接触が少ない時、外国人の受容は一般に「相対的に開放的」となる。

②中層—外国人をその民族に基づいて「何人(ジン)」として区別する「差異的認知」

表1 日本人の外国人認知・態度・受容指向

	認 知	態 度	受容指向	ラベル
表層	一般的認知	漂流的態度	相対的開放性	ガイジン
中層	差異的認知	差異的態度	民族的序列性	何人(ジン)
深層	基底的認知	情念的態度	全体的閉鎖性	イジン

の次元である。それは、民族認知に基づいて分化した「差異的態度」を生む。そこに歴史的に形成された日本人の他民族観が作用する。一般に外国人との接触頻度は表層の場合より多く、外国人の受容は「民族的に序列」づけられる。

③深層—外国人を日本社会に闖入したイジンとなすことで、自らの民族性を自覚する集団感情の次元である。その認知は「基底的」である。それは、日本人の心性の内奥に発する「情念的態度」を生む。態度は、外国人に関わる非日常的な事件を通して情動的に表出する。一般に外国人との接触頻度は多く、外国人の受容は「全体的に閉鎖的」である。外国人に対するデマや噂が、この次元に対応する。その時、偏見が扇情的に機能する【奥村 1990:第一部第2章】⁴³。

2. 検証

筆者らは、アジア・オリンピック大会直前の広島で、新来外国人（労働者）に関する市民意識調査を行った⁴⁴。調査対象は広島市民五〇〇人で、内、三九五五人について有効回答を得た（回収率七九・〇パーセント）。以下、調査結果の一部を用いて、外国人受容の深さに関する仮説検証の一助に資する。そして文献・資料を参照しつつ、解釈を試みる。

①表層

一般に外国人との接触頻度が少ないほど、日本人の外国人認知は曖昧となる。認知の曖昧さは、一方で外国人に対する偏見やステレオタイプを生む。他方で外国人に対する心理的な距離を生む。日本人の態度は、昨今の国際化の風潮に影響されて、寛容的となる。そして外国人の受容を指向する。接触頻度が多い場合は、この逆の過程が進行する。

明星大学グループの調査は、外国人が多い東京・新宿区で、住民が外国人の増加に不安や抵抗を感じて排他的な態度を示し、外国人がまだ多くない日野市で、住民が外国人の増加を余り気にせずより寛容的な態度を示した、

表2 「外国人に関わる具体的な活動に参加したことがありますか」「身のまわりに外国人が増えたと感じていますか」(%)

	感じてる	感じていない	計	実数
あな	79.4	20.6	100.0	68 325
い	64.3	35.7	100.0	
計	66.9	33.1	100.0	393

と報告している

〔明星大学

1993:69〕

表2は、次のことを示す。外国人に関わる活動に参加経験のある人は、最近外国人が増えたと「感じてい

る」傾向にある。反対に参加経験のない人は、「感じていない」傾向にある。ここで外国人との接触頻度が、外国人に対する認知に相関している。

表3は、次のことを示す。外国人が増えたと「感じ

表3 「身のまわりに外国人が増えたと感じていますか」×「外国人労働者が増えていることについてどう思いますか」(%)

	好ましい	好ましくない	計	実数
感じている	39.4	60.6	100.0	251
感じていない	48.8	51.2	100.0	129
計	42.6	57.4	100.0	380

ている」人は、外国人労働者が増えたことを「好ましくない」と思う傾向にある。反対に「感じていない」人は、「好ましい」と思う傾向にある。ここで外国人に対する認知が、外国人労働者に対する態度に逆相関している。

表4は、次のことを示す。外国人の増加を「好ましい」と思う人は、「家族や親族が結婚してもかまわない」「親しい友人としてつきあう」と、外国人を積極

表4 「外国人が増えていることについてどう思いますか」×「外国人をどの程度受け入れることができますか」(%)

	家族の結婚	親しい友人	隣人	住むのもいや	つきあいや	計	実数
好ましい	26.9	33.0	37.1	2.7	0.3	100.0	264
好ましくない	15.1	22.6	38.7	18.9	4.7	100.0	106
計	23.5	30.0	37.6	7.3	1.6	100.0	370

的に受容する傾向にある。反対に「好ましくない」と思う人は、「個人的つきあいはいや」と、外国人を消極的に受容する傾向にある。ここで外国人の増加に対する態度が、外国人の受容指向に相関している。

②中層

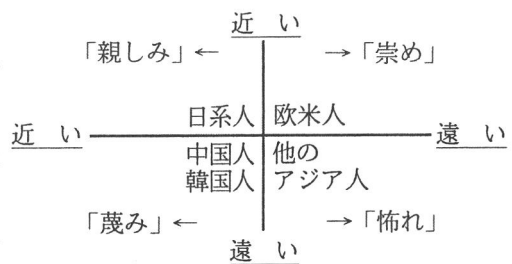
新来外国人に対する差別的な認知は、差別的な態度を規定する。

筑波大学グループの調査は、東京都豊島区・渋谷区の住民について、外国人受容の度が、白人▽韓国・朝鮮人▽フィリピン人の順で寛容的であった、と報告している。またアジア系外国人が多い豊島区で、外国人に対してより排他的であり、欧米系外国人が多い渋谷区で、外国人に対してより寛容的であった、と報告している。〔筑波大学 1990：第2部〕

ここで、日本人の新来外国人に対する差別的な認知と態度に関する仮説を構成する。図をみられたい。横軸に、認知に関わる指標として、日本人の他の民族集団との相対的な文化的距離をとる。即ち、日本文化がそれぞれの民族集団の文化と似ていると思うか否か（類似度）であ

る。縦軸に、態度に関わる指標として、日本人の他の民族集団との相対的な心理的距離をとる。即ち、それぞれの民族集団に対して親しみを感じているか否か（親密度）である。二つの軸をクロスさせると、民族集団に対する認知と態度に関する四つの類型が構成される。そして各類型に中心的に対応する民族集団を重ね、

図 外国人の差別的認知



民族関係を象徴する言葉を付す。これは、日本人の他の民族集団に対する態度の「類型」ではない。当然にも、それぞれの民族集団にはさまざまなメンバーが含まれる。彼ら・彼女らに対する日本人の認知と態度の様式も、一様でない。先行研究を参照しつつ、日本人の他の民族集団に対する文化的・心理的距離を次のように仮説する。

(1) 西欧人・東欧人―文化的距離は遠いが、心理的距離は近い。一般に日本人は、彼ら・彼女らに対して「崇め」の感情を抱く。

(2)日系人―文化的距離が近く、心理的距離も近い。一般に日本人は、彼ら・彼女らに対して同祖の者としての「親しみ」の感情を抱く。

(3)中国人・韓国人―文化的距離は近いが、心理的距離は遠い。一般に日本人は、彼ら・彼女らに対して「蔑み」の感情を抱く¹⁰⁾。

(4)他のアジア人―文化的距離が遠く、心理的距離も遠い。一般に日本人は、彼ら・彼女らに対して「未知の存在」としての「怖れ」の感情を抱く。但し「他のアジア人」には、東南・南・西アジアの多様な民族が含まれる。ゆえに日本人の彼ら・彼女らに対する認知・態度も、一様でない。ここで「他のアジア人」と一括するのは、たんに分析上の便宜にすぎない。

以上の仮説に基づく調査結果が、表5である。ここから次のことが指摘される。

(1)西欧・東欧人―親密度が案外と低い。それは、類似度に影響されない傾向にある。即ち、文化的距離が遠く、心理的距離もまた遠い。この結果は、心理的距離が近いという、先の仮説に違背する。ここには調査方法の検討の必要と合わせて、本調査の三つの事情が作用していると思われる。一、選択肢に一般に日本人に馴染みの薄い「東欧人」が併記されたこと。二、原爆

表5 「考え方や習慣の点で日本人と似ていると思いますか」×「親しみを感じますか」(%)

		感じる	感じない	計	実数
東欧人	似ている	66.0	34.0	100.0	50
	似ていない	51.6	48.4	100.0	320
	計	53.5	46.5	100.0	370
日系人	似ている	83.0	17.0	100.0	218
	似ていない	62.2	37.8	100.0	148
	計	74.6	25.4	100.0	366
中国人	似ている	79.8	20.2	100.0	173
	似ていない	50.0	50.0	100.0	186
	計	64.3	35.7	100.0	359
韓国人	似ている	74.3	25.7	100.0	175
	似ていない	44.5	55.5	100.0	182
	計	59.1	40.9	100.0	357
他のアジア人	似ている	70.2	29.8	100.0	84
	似ていない	38.0	62.0	100.0	266
	計	45.7	54.3	100.0	350

問題でアメリカに対して複雑な感情を抱く人が多い広島での調査であったこと。三、アジア大会の直前で、マスコミによるアジア情報が氾濫する中、西欧人・東欧人の印象が後退した時期の調査であったこと¹¹⁾。

(2)日系人―親密度が最も高く、「似ていない」と答えた人の多くでさえ「親しみ」を感じている。彼ら・彼

女らは、文化的・心理的に、日本人に最も近い民族集団である。但し日系人にはブラジル人・ペルー人を初め、南アメリカの国々の出身者が含まれる。彼ら・彼女らの言語・文化は互いに異なる。しかし日本人の態度は、一般に未分化である。日本人の日系人に対する親近感には、日本人の血統観のほか、戦前に沖繩県に次いで多くの出稼ぎ移民を南アメリカへ送り出した広島での調査であった事情も作用しているよう。実際、調査で、家族・親族に移民や帰国者がいると答えた者が多かった^例。

調査で、戦前に多くの日本人が南アメリカに移民として出た事実を「知っている」人三四五人の内、移民には「当時、日本での暮らしに困った人たちが多かった」と思う人が五九パーセント、「当時、立身出世を夢見た若い人たちが多かった」と思う人が四一パーセントであった。日本人が日系人に「親しみ」の感情を抱くとはいえ、彼ら・彼女らの祖先に対して「棄民像」を描く人は少なくない。

(3) 中国・台湾人―親密度が日系人に次いで高く、それは認知度に対応する傾向にある。即ち、文化的距離と心理的距離が基本的に対応する。ここで次の韓国人・朝鮮人よりも親密度が高い事実が、留意される。但し

中国人・台湾人・香港人は、中国民族の中で分化し、言語も少なからず異なる。日本人の彼ら・彼女らに対する態度も、一様でない。

(4) 韓国人―親密度がやや高く、その水準で認知度に対応する傾向にある。文化的距離と心理的距離が、基本的に対応する。即ち、西欧人イメージの場合とは反対に、類似度が親密度により強く影響している。(「他のアジア人」を除く)他の民族集団と比べて、文化的に「似ている」と思う人は親しみを「感じている」傾向にあり、「似ていない」と思う人は「感じていない」傾向にある。韓国人と朝鮮人(朝鮮民主主義人民共和国の人々)もまた、朝鮮民族の中で分化している。日本人の彼ら・彼女らに対する態度も分化している。

(5) 他のアジア人―親密度が最も低い。また類似度が親密度に最も影響している。文化的距離と心理的距離が対応する。彼ら・彼女らは、日本人にとって最も未知で疎遠な人々である^例。

南及び西アジア出身でイスラム教を信仰する人々は、日本人にとって「他のアジア人」の中でとりわけ未知な人々であろう。広島で彼ら・彼女らを見かけることは少ない。

③ 深層

外国人に対する態度の深層は、日本人に共有された歴史観／文化・社会観／人生観の中に潜む。それは日常は意識下に沈潜し、外国人に関わる出来事を契機に情動的に表出する。しかし、態度の深層を数量データを以て測定することはできない。ここではこの点を十分に留意した上で、態度の深層の形成に寄与し、また「それは替わる」(とみなす)要因として、外国人に関わる歴史観／文化・社会観／人生観をめぐる五つの指標を採る。以て態度の深層を推量する手掛かりとなす。また態度の傾向の強さをみるために、態度の表層(外国人の増加を「好ましい」と思うか否か)とそれらの指標の相関をみる。

具体的に、歴史観の指標として、在日韓国・朝鮮人観及び「五〇年前の日本の戦争」(アジア太平洋戦争)観を採る。文化・社会観の指標として、日本文化観(日本文化は普遍的と思うか否か)及び日本民族観(日本人は単一民族と思うか否か)を採る。また人生観の指標として、社会生活で「身内・他人」「上・下」の区別にこだわるか否かという、権威主義的パソナリティを採る⁽²²⁾。

表6は、次のことを示す。在日韓国・朝鮮人の権利獲得運動に対して肯定的な意見(「彼らの権利獲得の運動は当然だ」「彼らの権利問題は日本人の責任だ」)を抱く人は、六三・二パーセントである。在日韓国・朝鮮人の

権利獲得運動は、一応承認されている。しかし否定的な意見(「外国人なのだから権利の制限もやむをえない」「日本社会に不満なら国へ帰れ」)を抱く人が、三六・八パーセントいる。

次に、外国人の増加を「好ましい」と思う人は、在日韓国・朝鮮人の権利獲得運動に対して、肯定的な意見を抱く傾向にある。反対に「好ましくない」と思う人は、否定的な意見を抱く傾向にある。即ち、外国人の増加に対する態度と在日韓国・朝鮮人の権利獲得運動に対する意見は相関する。

表7は、次のことを示す。

五〇年前の戦争に対して否定的な意見(「侵略戦争だった」)を抱く人は、二七・一パーセントに留まる⁽²³⁾。そ

表6 「外国人が増えていくことについてどう思いますか」×「在日韓国・朝鮮人の権利獲得運動についてどう思いますか」(%)

	権利制限仕方ない	自分の国へ帰れ	日本人の責任だ	権利運動は当然だ	計	実数
好ましい	21.3	8.9	24.4	45.4	100.0	258
好ましくない	32.1	20.8	16.0	31.1	100.0	106
計	24.5	12.3	22.0	41.2	100.0	364

れはアジア諸国がしばしば指摘する、戦争に対する日本人の「反省のなさ」を想起させる。反対に部分的にせよ、戦争を肯定する意見

（「仕方なかった」「一部の軍人が悪かった」）を抱く人は、七二・九パーセントに及ぶ。ここで、かつて戦争遂行の大義とされた「アジア解放の戦争だった」という意見をもつ人はわずかであり、そのイデオロギーが殆ど形骸化している点が留意される。

次に、外国人の増加を「好ましい」と思う人は、「侵略戦争だった」と思う傾向にある。反対に「好ましくない」と思う人は、「仕方なかった」と思う傾向にある。即ち、外国人の増加に対する態

表7 「外国人が増えていることについてどう思いますか」×「五〇年前の日本の戦争についてどう思いますか」(%)

	一部の軍人が悪い	アジア解放の戦争	仕方無かった	侵略戦争だった	計	実数
好ましい	41.1	2.7	24.6	31.6	100.0	256
好ましくない	46.9	3.1	34.7	15.3	100.0	98
計	42.7	2.8	27.4	27.1	100.0	354

度と戦争に対する意見は逆相関する。

表8は、次のことを示す。日本の文化は外国人にも「理解できる」と、日本文化を普遍化して捉える人は、六九・〇パーセントである。反対に外国人には「理解できない」と、日本文化を特別化して捉える人は、三一・〇パーセントである⁽²⁴⁾。

次に、外国人の増加を「好ましい」と思う人は、日本文化は外国人にも「理解できる」と思う傾向にある。反対に「好ましくない」と思う人は、「理解できない」と思う傾向にある。即ち、外国人の増加に対する態度と日本文化をめぐる意見は相関する。

表9は、次のことを示す。日本民族が単一民族である「思わない」人は、二八・五パーセントに留まる。反対に「思う」人は、七一・五パーセントに及ぶ。今日「日本民族は単一民族である」という意見は、日本ナショナ

表8 「外国人が増えていることについてどう思いますか」×「日本の文化は外国人にも理解できると思いますか」(%)

	できない	できる	計	実数
好ましい	26.2	73.8	100.0	260
好ましくない	42.9	57.1	100.0	105
計	31.0	69.0	100.0	365

リズムの中心命題となっている。数字は、この意見が多く日本人を捉えていることを示す。

次に、外国人の増加を「好ましい」と思う人は、（どちらかといえば）日本は単一民族とは「思わない」と答える傾向にある。反対に「好ましくない」と思う人は、（どちらかといえば）「思う」と答える傾向にある。即ち、外国人の増加に対する態度と日本民族観はやや逆相関する。

表10は、次のことを示す。社会生活での身内・他人／上・下のいずれの区別にも「こだわらない」人は、二八・四パーセントに留まる。反対に身内・他人／上・下の区別またはそのいずれかに「こだわる」人は、七一・六パーセントに及ぶ。それ程に、日本人は権威主義的である。

次に外国人の増加を「好ましい」と思う人は、身内・

表9 「外国人が増えていることについてどう思いますか」×「日本は単一民族社会だと思いますか」(%)

	思う	思わない	計	実数
好ましい	69.4	30.6	100.0	255
好ましくない	76.4	23.6	100.0	106
計	71.5	28.5	100.0	361

他人／上・下の区別に「こだわらない」傾向にある。反対に「好ましくない」と思う人は、「こだわる」傾向にある。即ち、外国人の増加に対する態度と権威主義的態度は逆相関する。

イエに囚われた日本人の夫の暴力や差別のため、家族解体の憂目を体験した外国人妻は少なくない。広島でもそのようなフィリピン女性の話を多く聞き取った⁽²⁵⁾。

以上は、次のように要約される。即ち、日本人

の外国人に対する態度で外国人の増加を「好ましい」と思う人は、歴史観／文化・社会観で開放的な態度を示し、

表10 「外国人が増えていることについてどう思いますか」×「あなたは身内・他人や上・下の区別にこだわる方ですか」(%)

	両方こだわ	身内他人こだわ	上・下こだわ	両方こだわらない	計	実数
好ましい	29.5	14.8	23.5	32.2	100.0	264
好ましくない	47.2	17.9	16.0	18.9	100.0	106
計	34.6	15.6	21.4	28.4	100.0	370

人生観で反権威主義的な態度を示す傾向にある。反対に「好ましくない」と思う人は、歴史観／文化・社会観で閉鎖的な態度を示し、人生観で権威主義的な態度を示す傾向にある。日本人の外国人に対する態度と歴史観／文化・社会観／人生観は、積極的に相関または逆相関する。

但し意識の表層に位置づく外国人に対する態度と深層を代替する歴史観／文化・社会観／人生観の相関の間には、いくつかの要因が介在する。故にここでは、相関・逆相関の事実を指摘する以上に出るものでない。意味連関の解釈のためには、さらに民族集団に対する差別的態度、同化への態度（「外国人は日本社会に同化すべきだ」と思うか否か）、その他の要因と歴史観／文化・社会観／人生観の相関をみる必要がある⁽²⁶⁾。

四、態度の形成と変容

日本人の新来外国人に対する態度の形成には、日本人と外国人の利害関係が関わる。また態度の変容には、態度の深さに応じたズレが伴う。次に、外国人に対する態度の形成と変容（の一面）について考える。

①利害関係

日本人と外国人の社会関係は、利害関係に規定される。「軽い」利害関係は、日本人と外国人の少ない接触頻度

の、外面的な関係に対応する。それは、外国人に対して関心がないか好奇心に留まる状況である。その場合、外国人に対するイメージは、漠として寛容的である。

「重い」利害関係は、日本人と外国人の多い接触頻度の、近接した関係に対応する。そこで、外国人に対する確信的な態度が形成される。「重い」には、二つの意味がある。一、「ぬきさしならない」という意味。即ち、外国人との利害関係に対する重大な顧慮なしに日本人の生活が成り立たないような状況をいう。二、「基底の」という意味。即ち、日本人の態度の内奥の次元である。それは、非日常的な利害関係の場面で危機感として表出する。

重い利害関係は、外国人に対する態度を決定的に方向づける。かりに日本人が外国人に嫌悪感や反感を抱こうとも、外国人の労働力や購買力を必要とする限り、外国人を否応なく受け入れざるをえない。利害関係が態度を押し込む。次に日本人は、そのような状況の合理化をはかる。そして次第に外国人に対する消極的な態度を変更していく。

次の報告書は、東京・上野の商店街の日本人が、公園に集まるイラン人に対して不安と嫌悪感を抱きなが

らも、顧客として彼らを受け入れていく様について、報告している。「外国人との共生社会研究会」1994: 151]

利害関係は、日本人の外国人に対する関係の余裕の度合を決める。軽い利害関係のもと、日本人は余裕をもって外国人に関わる。国際化の風潮の中、一般に日本人は外国人に対して寛容的になる。反対に重い利害関係のもと、日本人の態度には余裕がない。外国人に対する態度選択の幅は限られる。日本人は、一般に排他的になる。

日雇労働者の街・横浜の寿町に、一九九〇年代初め、韓国からの出稼ぎ労働者が急増した。折しも日本経済の不況で日雇仕事之急減していた時期で、韓国人に仕事を奪われるのではないかと、日本人労働者の間に不安が高まった。仕事にあぶれることは、彼らにとって野宿と飢えを意味する。韓国人労働者に対する反感が募った。労働福祉センターの壁に残された「朝鮮人は害人(ママ)追い出せ」の差別落書は、この時の日本人労働者のヒステリー状態を刻む。労働福祉センターで、一九九四年六月二九日、七つの差別落書が確認された⁽²⁷⁾。

中流の人は外国人に寛容だけど、ここ(山谷)の人にはその余裕がないんだよね。だから外国人に対してきついんだよね⁽²⁸⁾。

但し利害関係は、外国人に対する態度のあり様と一義的に照応するものではない。「余裕がある」は、つねに寛容的たることを意味せず、「余裕がない」は、つねに排他的たることを意味しない。

東京・新宿区の調査で、日本人住民は、増加するアジア系外国人に対して過剰反応していないとされた。その原因は、日本人住民の都心部からの流出による地域機能の空洞化にあるという。そしてアジア系外国人は、流出日本人の隙を埋めるかたちで、地域の活性化に機能した[奥田・田嶋 1993:307-308、稲葉 1994:80]。ここで日本人の「余裕がない」状況は、外国人に対する寛容的な態度を結果した。

②態度の変容

団塊としての新来外国人の流入以来、日本の外国人の問題状況は変わった。外国人の定住化とともに、国際結

婚が増えた。それに伴って、子の国籍問題や生活問題が浮上した。この中、外国人に対する日本人の態度もまた、変わりつつある。ではそれは、どの方向に、どの程度にか。変容は、外国人観の基底をなす態度部分に食い込んでいるか。それは、日本人と外国人の新たな関係を予見する勝れて実践的な問いである。

外国人に対する日本人の態度の変容は、態度の深さに応じて速度を異にする。態度は、表層で、外国人をめぐる世相や個人の外国人接触に影響されて容易に変容する。社会が外国人に対して排他的になれば、人々の心情もその方へ動員される。不愉快な外国人体験をすれば、人々の態度はたちまち硬化する。逆も然りである。

これに対し態度の深層は、世相や日常体験によって容易に変容しない。それは、社会や個人の危機場面によって容易にそれが、日本と外国人の出身国の外交関係の悪化といった、新来外国人に直接関わらないような場合でも）表面に情動的に噴出する。そして表層の寛容的な態度を瞬時にして吹き飛ばす。非合理的なデマや噂は、日常の漠とした不安からさえ発生する。その時、外国人が生贖にされ「敵」にされていく。

一九九四年、朝鮮民主主義人民共和国の「核施設査

察」に関わる報道が一斉になされた際、広島でも在日韓国・朝鮮人の児童に対する「チマチヨゴリ・ハラスマント」事件が多発した。

筆者らの調査で、広島市内のある街路の「薄暗い」トンネルに、夜な夜な「薄気味悪い」外国人が集まって、通行する日本人をじっと見ている、というデマを聴取した⁽²⁹⁾。

五、結語

本稿は、調査結果をもとに、日本人の新来外国人に対する態度の深さの断層及び外国人の差異的受容に関する一つの分析と解釈を提示した。最後に、今後の研究の方向を一点、付言する。

分析は、外国人を鏡とした日本人の民族的自我の自己同定の作業でもあった。民族的自我は、重層する他者肯定と他者否定の総和に他ならない。そして論点は、次の一步に踏み込む。外国人「問題」の研究は、日本近代の質を問う日本社会論へ発展されなければならない「間庭 1990/今津 1993」。そして他民族の包摂と排斥、排外と排外の史的分析の中で、日本人の民族的自我が腑分けされなければならない。

- (1) 小数点以下は四捨五入。以下、同じ。
- (2) この大半が、未登録就労者であると推定される。
- (3) 日本人と新来外国人の民族関係を分析したものととして、例えば次のものがある。「外国人との共生社会研究会 1994」
- (4) 表層・中層・深層という態度の深さについては、既に江嶋の枠組がある [江嶋 1985:113-128]
- (5) 「日本民族」の観念が民衆の間に定着したのは、漸く一九世紀末から二〇世紀初めの日清・日露の戦間期であつた。 [尹 1994: 8]
- (6) 次の書は、戦前の「多民族・混合民族論」から戦後の「単一民族論」に至る日本民族論の変遷を辿るかたちで、日本と東アジア・「南洋群島」の民族関係のイデオロギー史を通観している。 [小熊 1995]
- (7) 「不法残留者」の増加は、超過滞在者の定住化を推定する一助となる。 [法務省 1993:100]
- (8) 次の論文は、東京・新宿における民族コミュニティの形成を分析している。 [奥田・広田・田嶋 1994:79-115]
- (9) 共生は、文化的多元主義に対応しよう。しかし語の用法は多義的で、意味も曖昧である。
- (10) 都築は、団地社会における日本人と日系ブラジル人の「共生」関係を分析している。 [都築 1994: 5-53]
- (11) 宮島は、「漢字文化圏」出身者と「非漢字文化圏」出身者の、言語的障壁の差異に基づく階層性を指摘している。 [宮島 1989:22]
- (12) 次の論文は、外国人労働者の階層化（の一断面）を分析している。 [青木 1992:21-28]
- (13) 外国人に対する偏見の分析は、態度の深層を取り出す手掛かりとなる。また偏見自体、表層から深層に至る態度の深さに応じた中身の層をなす。また「外国人が増えると犯罪が増えて、治安が悪くなる」といった類の表現の分析も、深層分析の鍵となる。
- (14) 調査主体は、都市社会学研究所主催のアジア社会学セミナーである。調査は、一九九四年九月〜一〇月、アンケートによる訪問面接法で行われた。調査対象者は世帯主またはその妻で、行政区ごとの外国人登録人口に基づくサンプルの層化比例配分の上、無作為に抽出された。
- (15) 筆者らの調査は、一都市での小規模な調査である。ゆえに結果の一般化は慎まなければならない。表のパーセントは、無回答を除く数字である。以下、同じ。
- (16) 外国人の増加に対する態度について、「感じている」

「感じていない」のパーセントに、有意差はなかった。(17)日本人のアメリカ黒人に対する心理的距離は遠い。それは、アメリカ白人と反対の「蔑み」の方向にある。そのこと自体、アメリカ白人に対する「崇め」の表れである。

(18)日本人の中国人と韓国人に対する態度は、日本近代の経緯に規定されて異なる。遠山は、戦前の日本人の朝鮮民族に対する「支配者意識」、中国民族に対する「輕侮に傾斜した対抗意識」、東南アジア諸民族に対する「憐憫をまじえた同情意識」を、他民族意識の「三重構造」と呼ぶ〔遠山 1992:256〕。この意識の痕跡が、戦後の日本人の他民族認識の根幹に刻まれている。(19)原爆投下は太平洋戦争の早期集結のために必要であったとするアメリカに支配的な意見は、広島市民のアメリカに対する反感を募らせた。それは、戦前多くの近親者を出稼ぎ移民として送り出してきたアメリカへの追慕の情を相殺してあまりある。

(20)とはいえ、日系人に対する差別は厳しい。広島でも、不況期に入り、日系ペルー人の解雇・賃金不払い、出入国管理局による強制送還が相次いだ。そして多くの日系ペルー人が帰国していった。日本人支援者(五一歳)の話。一九九六年七月二一日

(21)日本人の「他のアジア人」に対する態度には、次のような史的経緯がある。明治期の「南進論」から昭和戦前期の「大東亜共栄圏」に至る時期、日本人は、東南アジアの海洋諸国及びミクロネシアやマーシャルの「南洋諸島」の人々を「未開な土人」で文明化されるべき存在とみなした〔今泉 1993:52〕。今日の(若い世代を除く)日本人の中にも、このような「蔑み」と「憐み」の感情が潜んでいる。

(22)単一民族観は、戦後に広まった意見である。戦前は、日本・朝鮮・「満州」・「支那」・蒙古の「五族協和」のイデオロギーとの整合性を保つために、日本民族は、元来、熊襲、隼人・肥人・倭人・蝦夷の民族からなる「雑種」「混合」「複合」民族であったとされた〔尹 1994:157〕。

(23)「侵略」の語は、アジア太平洋戦争の評価のキー・ワードである。ここで「侵略戦争だった」の意見は、戦争を否定する意見の代表としてある。

(24)日本文化の特別化は、しばしば日本人の民族中心主義に作用する。

(25)広島県福山市にあるフィリピン女性組織 (Filipino Friendship Organization) での聞き取り。一九九六年四月二五日

(26)筆者らの調査でも、日本人の外国人に対する同化指向と深層意識の相関をみたが、十分な有意差はなかった。

(27)これに対し、ハンゲルの落書も多かった。

(28)東京・山谷の日雇労働者(四二歳)の言葉。一九九四年七月一七日

(29)調査の中で聴取した話。一九九四年九月三〇日

青木秀男 1992 「都市のアーバン・エスニシティー都市下層の調査から」『社会学評論』49-4

稲葉佳子他 1994 『外国人居住と変貌する町ーまちづくりの新たな課題』 学芸出版社

今泉裕美子 1993 「南洋群島委任統治政策の形成」『岩波講座・近代日本と植民地』 大江志乃夫他編 岩波書店

今津孝次郎 1993 「異人・非人・外人・人間ー日本人のウチとソト」 中野秀一郎・今津孝次郎編著 『エスニシティの社会学ー日本社会の民族的構成』 世界思想社

尹健次 1994 『民族幻想の蹉跌ー日本人の自己像』 岩波書店

江嶋修作 1985 『社会「同和」教育変革期』 明石書店
奥田道大・田嶋淳子 1993 『新宿のアジア系外国人』

めぐん

奥田道大・広田康生・田嶋淳子 1994 『外国人居住者と日本の地域社会』 明石書店

奥村隆 1990 「メディアがつくるイメージー外国人とは『どのようなひと』なのか」 報告書(町村敬志編)

『「国際化」の風景メディアからみた日本社会の変容』 「国際化とメディア」研究会

外国人との共生社会研究会 1994 報告書 『来日アジア・アフリカ系外国人の生活適応と日本人との共生に関する研究』

梶田孝道 1994 『外国人労働者と日本』 日本放送出版協会

小熊英二 1995 『単一民族神話の起源ー日本人の自己像の系譜』 新曜社

総務庁統計局 1994 『日本の統計 一九九四年』

総理府 1994.3.1 『時の動き 政府の窓』
田嶋淳子 1991 「アジア系外国人の地域社会における適

応の諸形態」『現代の社会病理』 4 日本社会病理学会

筑波大学社会学研究室 1990 報告書(町村敬志編) 『東京から TOKYO へー変貌する地域社会』

遠山茂樹 1992 『遠山茂樹著作集』 4 岩波書店

都築くるみ 1994 「豊田市における日系ブラジル人の居住と社会的ネットワーク」『日本都市社会学会年報』

12 日本都市社会学会

法務省出入国管理局 1993 『平成四年版 出入国管理』

間庭充幸 1990 『日本的集団の社会学—包摂と排除の構造』

河出書房新社

宮島喬 1989 『外国人労働者迎え入れの論理』 明石書店

明星大学人文学部社会学科 1993 報告書（渡戸一郎編）

『アジア都市「東京」のコミュニティ—その多様性と

重層性』

